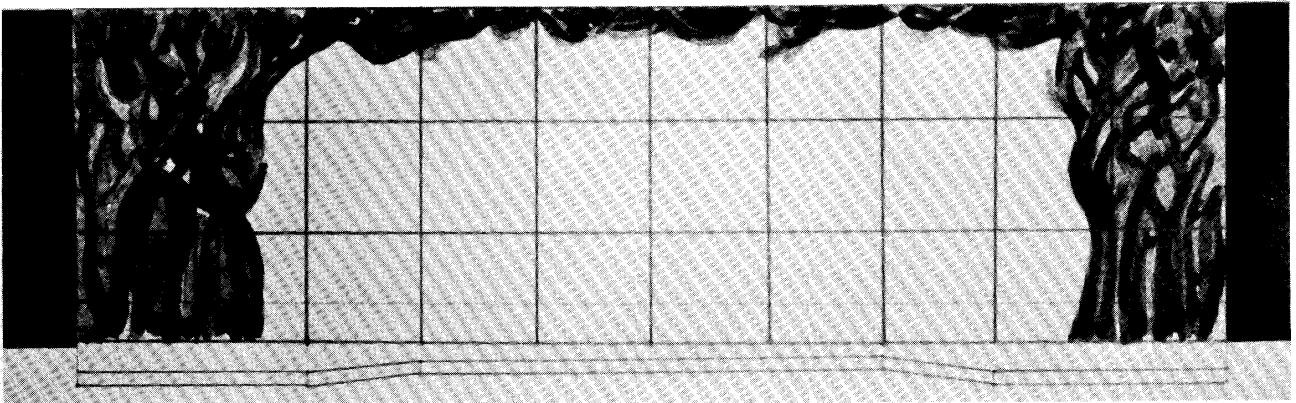


創作バレエ「朝日長者」 4幕6景の装置の制作について

*A Study of the Stage—setting for the Ballet Created by Imado Kotoku
in four Acts and six scenes, “Asahi Tyozya”*

大 蔵 善 雄



序 文

昭和49年10月1日 大分文化会館大ホールにて公演
台本 今戸公德 作曲 野崎哲 演出 執行正俊
企画製作 大分県洋舞踊協会

このたび第十回大分県芸術祭主催行事として、バレエ「朝日長者」が上演された。私はこの「朝日長者」の装置と小道具を主とした美術を担当した。「豊後風土記」の中の僅か五行に書かれた素朴な記述をもとに作家の今戸公德氏が二時間にわたる大作にまとめあげたものである。九重の山々を背景にくりひろげられるロマン、餅が白鳥と化す原型を作った先祖の人たちの悲しい思いが、痛いほど胸をさしてくる。夕日を煽ぎ返す話も、いつの時代かの人たちが、神を畏敬するあまりの祈りに似たロマンであろう。

私はスタッフの方たちと数度千町無田や男池を訪れ、「豊後風土記」をひもといてみた。

野崎哲氏の作曲はすばらしいものであった。「朝日長者」は既成のバレエ曲の模倣ではなく大変ユニークなものである。私と演出の執行正俊氏は台本と作曲を大切にイメージをこわさない様に細心の努力をはらったものである。

以下「朝日長者」をよりわかりやすくするため、装置のスケッチを添付した。

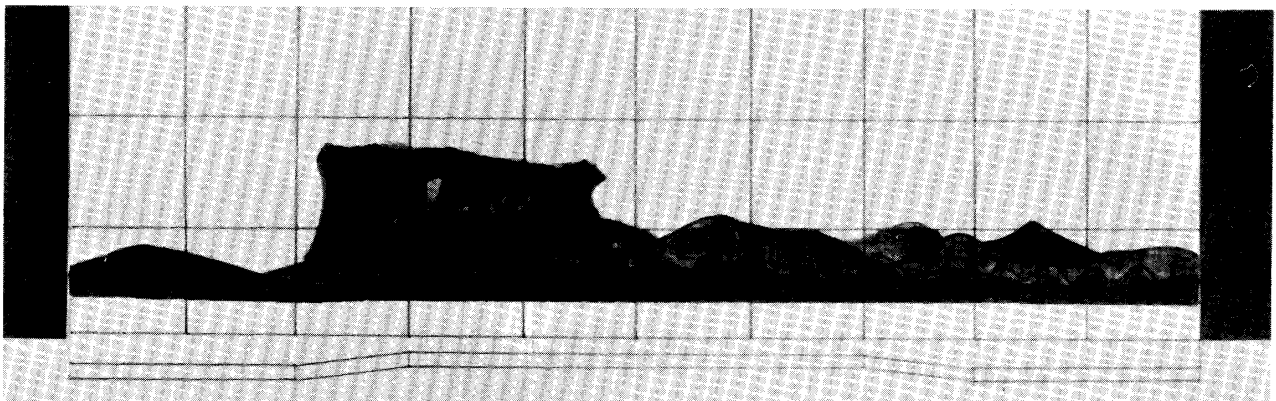
尚、使用した大分文化会館大ホールの舞台は高さ3間、巾10間であった。添付した舞台のイラストレーションはその寸法の基盤目にあわせてかいたものである。又、バレエの装置は「ドロップ」という布製の天井より吊り下げる装置が主である。クラシックバレエは特にこの手法を用いた。「朝日長者」もこの原則的な手法で装置を制作した。

遠景のみベニヤ板の画き割を使用した。その他はすべて布による画き割である。動きの大きなバレエにおいては強くこの様式を要請される。制作する当事者としては手の込んだ「ドロップ」はかなり面倒な仕事とってよいだろう。



第1幕 序曲

- 序曲 ① A 大地がゆらぎ天がふるえる様な音楽がしづまって穏やかな音楽になると幕が上がる。
- ① B 紗幕の前、紗幕には一羽のごい鷺が飛ぶ大きな姿がシルエットで、又雲の流れのエフェクトが写し出されている。(暗い感じ)



第1幕 第一景 前千町・後千町

音楽が民謡調の悲しい曲にのって、紗幕の前後をとおして見える数人のごいサギの精と貧しい村人達が打ち沈んだポーズから一人立ち二人立ちして踊り出す。途中で紗幕が上がると九重の連山を遙かに見渡す風景となる。

(第1幕) 黄金の腕輪

第一景 前千町・後千町

昔、豊後の国玖珠九重山麓に住む田野長者は、名前を田野公伊呂俱と言って、前千町、後千町の広い荘園をもっていた。だが、亡き父の代から、美田の前千町に比べて、後千町はフケ畑である。しかもサギの遊び場になっていて、収穫は少なく村人たちの生活も恵まれなかった。

そんな稔りの少ない後千町に、伊呂俱の母牧の戸は心を痛めていたが、それより息子の伊呂俱が、嫁もとらず

に、狩ばかりに遊びほうけている姿の方が頭痛のたねであった。

ある日、牧の戸は従者をつれて狩にでて行こうとする伊呂俱を見て、行く手をさえぎり、「良い娘が見つかったよ」と昨夜みた夢の中で、白鳥たちに囲まれて、遠くに去ってしまうくす姫という女の右腕に、金の腕輪がはめられていた話を、不思議そうに伊呂俱に話して聞かせるのだが、遊びざかりの伊呂俱は、てんで耳をかそうとしない。伊呂俱は従者をつれて狩に出て行く。が、折から暮れなずむ九重の山の端をとぶ一羽の白鳥に、伊呂俱は、なぜか心を奮われるのであった。



第1幕 第二景 愛の讃歌

幕が開くと、玖珠川が月の光に輝いている。川の彼方に万年山のメーサが光る風景。その麓に草壁長者の館の遠見。上手に楠の大木。そのわきに祠がある。玖珠川の水の精たちが陽気に踊っている。

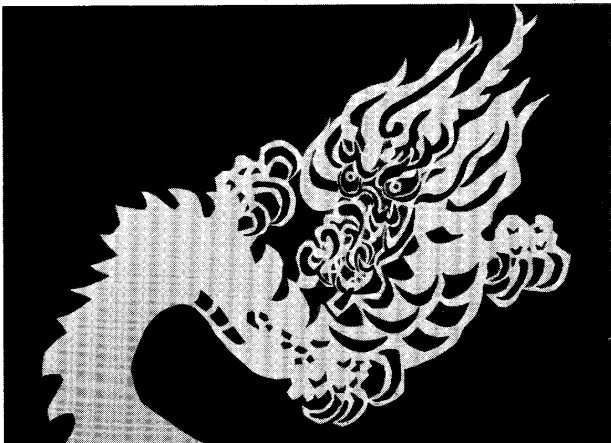
月が雲にかかり、風が出て大地が鳴りはじめると、楠の大木の枝から、大蛇のかま首が無気味に祠を伺っている。祠に巻きつく大蛇。すごい嵐が悲鳴のような音をたてている。

第二景 愛の讃歌

月明りをたよりに狩をしていた伊呂俱は、森に迷いこんでしまう。やっと玖珠川の畔に出てきたが、ふと見ると玖珠荘草壁長者夫妻が泣いているではないか。「なぜ泣くのか」と伊呂俱がたずねると、草壁長者は、「三人娘のうち二人まで大蛇にさらわれてしまった。あと残った一人の娘も、実は今夜、大蛇がさらいに来るのです」。

夫妻のいたいたしい話を聞いていた伊呂俱は、草壁長者に、大蛇を平らげることが約束し、三女のかぶっていた打掛けをかぶり、三女になりすまして、楠の大木の根

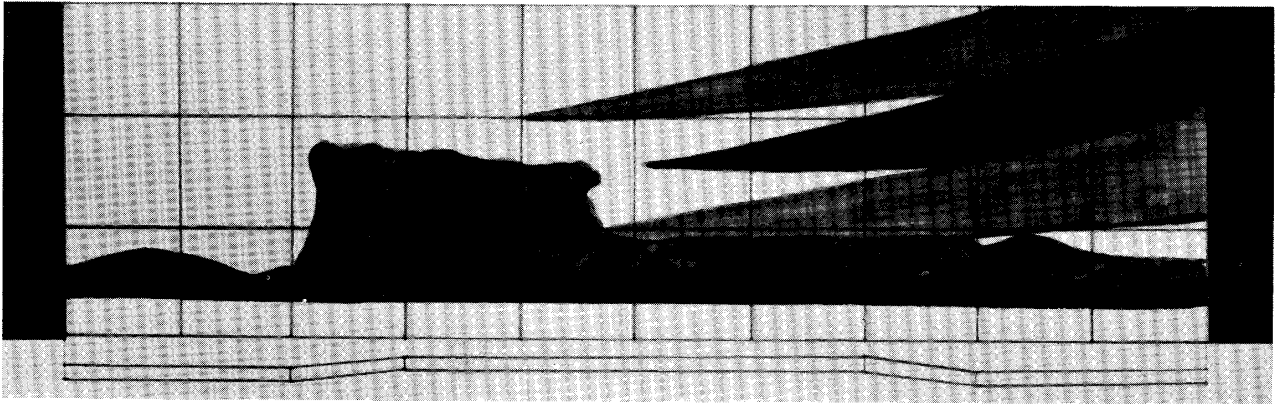
元に埋ってしまう。やがて大きな大蛇が、伊呂俱に襲いかかってくる。伊呂俱は、大蛇の物凄い力に危く殺されそうになるが、必死の力ではね返し、遂に、打ち負かしてしまう。だが、伊呂俱も精魂つきたか気を失い、その場に倒れてしまった。そんな伊呂俱を見て草壁の三女は玖珠川の水をふくんで口移して飲ませる。と、伊呂俱はみるみる精気を取り戻す。見ると、彼女の右腕には、まぶしく輝く金の腕輪がはめられているではないか。牧の戸の夢にでてきたくす姫だ、と伊呂俱は驚く。くす姫は、生命の恩人伊呂俱のために、愛の讃歌を踊りつづける。



大蛇のスライド A



大蛇のスライド B



第2幕 朝日誕生

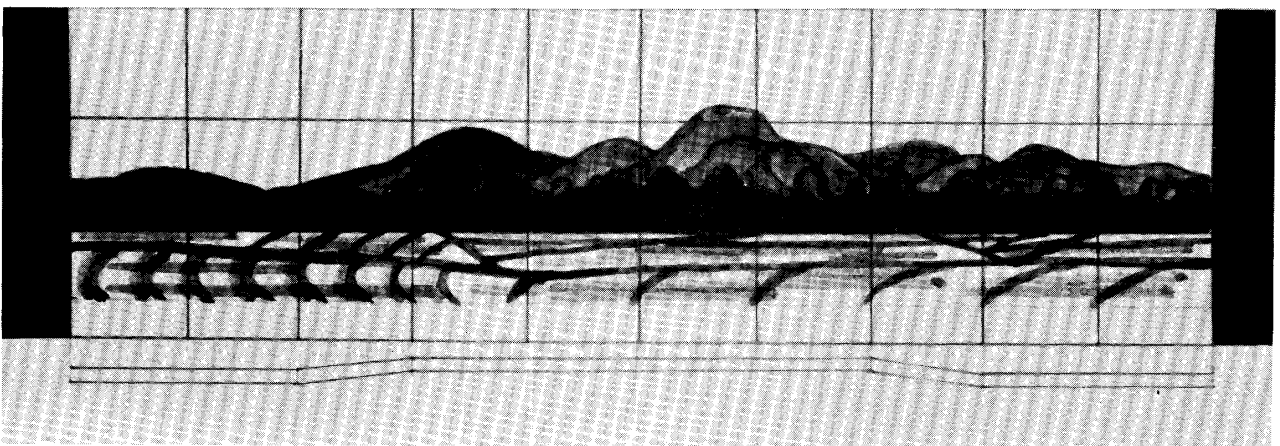
舞台は伊呂俱とくす姫の結婚の宴の場である。一幕一景を基本にしてある。結婚の宴の美しさを出すため抽象的な形で雲を表現したドロップを使用、色彩はいぶし銀の感じである。

この前で郷土民謡など、ふんだんに盛りこんだ村人たちの陽気な踊りがくりひろげられる。家僕や侍女たちのコミックな踊りなど、全員がかわるがわる伊呂俱とくす姫の結婚を祝福する。

(第2幕) 朝日誕生

くす姫を娶った伊呂俱は、折りから結婚の祝福をうけている。村人たちの踊りは、踊りの輪が幾重にも重っていつ果てるとも知れない。

やがて、くす姫、伊呂俱の歓喜の踊りがはじまる。と不思議なことに、みるみるうちに、後千町の湿田に、黄金の穂波が波うっているではないか。伊呂俱は、くす姫の精気に誘われて、果報者になり、分限者となるのであった。愛と富とを手に入れた朝日長者の誕生である。



第3幕 第一景 愛は哀しく

舞台はカーテン前(中ドン)

前千町・後千町の田園風景、ちょうど田植どきで大勢の村娘たちが、笠を持って田植への踊りをしている。

上手から出てきたくす姫、田植踊りの間を縫って下手に行こうとすると、一人の乙女がよろよろと倒れかゝる。

くす姫、驚いてかけ寄り抱き起す。

花道からは、御神子を先頭に苗をかついだ乙女たちが、荷物の重味であえいでいると、

創作バレエ「朝日長者」4幕6景の装置の制作について

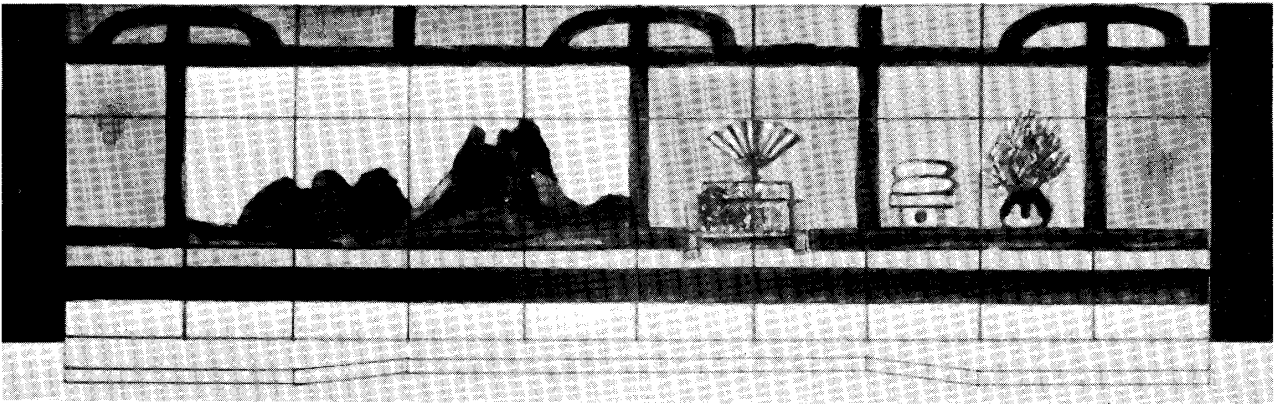
御神子の笈が容赦なくとぶのであった。又上手花道からは水汲み女の一團が水桶をかたにこれも今にもつぶれそうに続いていく、御神子は、気でも狂ったように、それらの乙女たちを笈でしごくのであった。

(第3幕) 愛は哀しく

第一景 田植唄

それから三、四年後、米の精くす姫を得て、後千町は美田と化し、館も建てかえられ、朝日夕日に輝く豪華な朝日長者の屋敷は、遠くから眺められた。反面、村人たちは、田植や苅り入れに酷使される。くぐつの姉弟松前

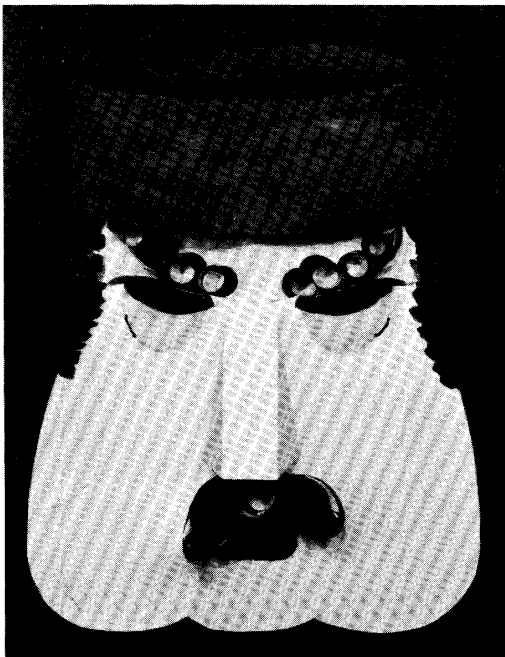
・久万の二人が、重い水桶け運びに耐えかねて埋っていると、朝日長者の家僕御神子のムチが容赦なくとんでくる。そんなくぐつの姉弟を、くす姫は優しくいたわる。くす姫の慈しみに姉弟は安堵してか、遠い故郷、伊豫の国から、人買いにさらわれ、売られ売られて来た運命を、くす姫に語って聞かせるのであった。



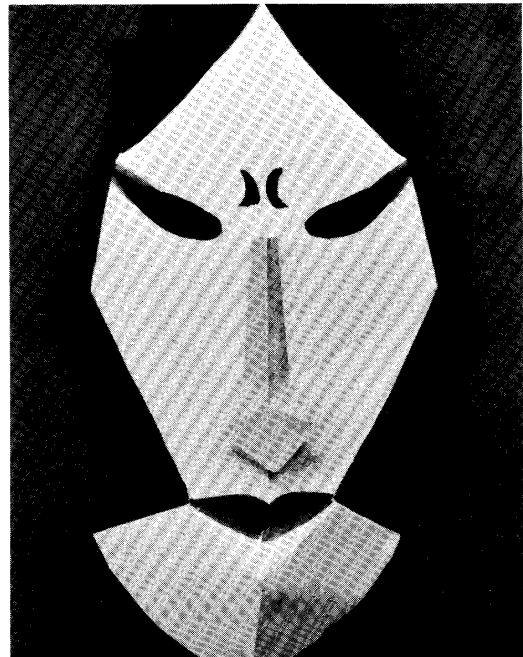
第3幕 第二景 朝日長者の屋敷

第4幕 餅の的

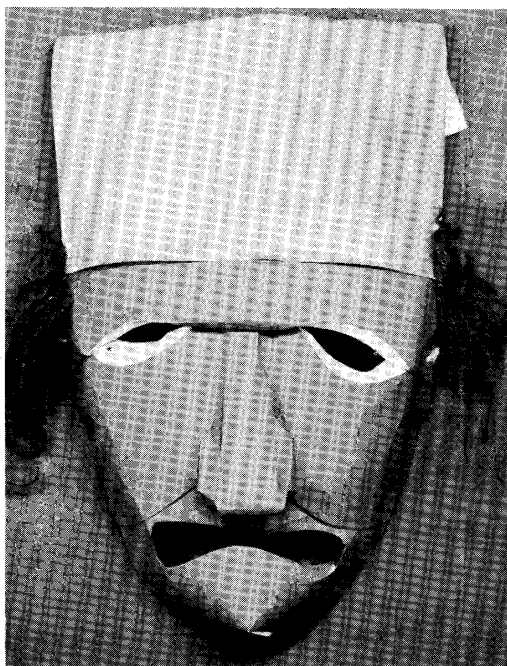
舞台は中ドンをとばし明るくなると、贅をつくした朝日長者の新屋敷。舞台中央の座敷のフレームから、一幕と同じ風景が遠見で見えている。華やかな舞台は真昼の輝きである。



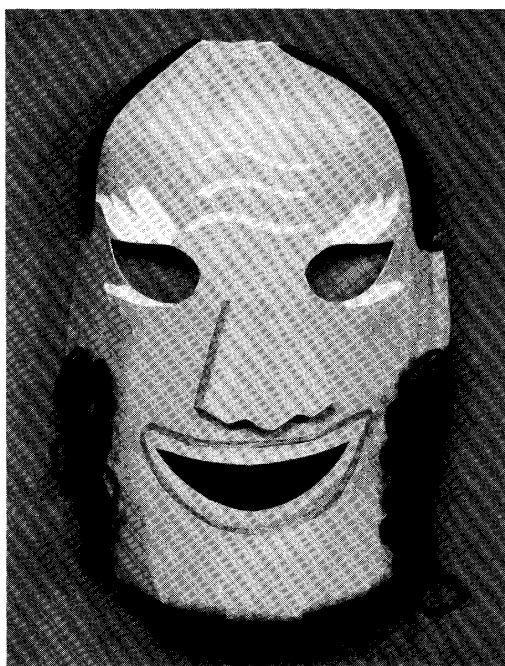
朝日長者面



牧の戸面



金売り金次面



大岩扇面

第3幕 第二景 朝日長者の屋敷

豪華な朝日長者の新屋敷である。米で買った財宝をもてあまし、侍女達に囲まれ、朝日長者の心は驕慢になるばかりか、くす姫への愛もさめている。そこに、くす姫は、松前・久万のくぐつ姉弟を、親のいる伊豫の国に帰してやるように哀願する。が折あしく、珊瑚をもって来た金売りの金次は、姉弟を見て、指差し、逃亡者だと朝日に告げる。またしてもくす姫は苦境に立つ。

一方、太陽のあるうちに田植を終わらなければ、と言われるが、早や、前千町・後千町は、夕日に包まれている。暮色のせまる九重の入り日を見て、こともあろうに、朝日長者は、扇をとって、沈む夕日を、扇ぎ返すのであった。



侍女面

第4幕 餅的

序奏の中に、幕があくと、三幕と同じ舞台。舞台鼻はお正月の餅つきで、騒々しい。(玖珠地方に昔から伝わるだんご祭を参考にしたい)正面に床の間があり、くす姫が侍女をつれて、鏡餅を飾りつけている。

大岩扇、小岩扇の引き合うお餅が長くのびて真中からぶつつり切れる。しり餅をつく二人であった。

朝日が出てきて、弓の射的をやるという。御神子達は

創作バレエ「朝日長者」4幕6景の装置の制作について

弓の踊りを踊る。朝日の弓は見事で、いづれも標的に命中する。周囲を見廻す朝日は的がなくなったと思う。

朝日長者は、床の間の鏡餅を的にするといいだす。くす姫はびっくりして、「それだけは、かんべんして下さい。私の命です」と必死の表情でたのむのであった。

再度の願いもきゝいれられず、鏡餅は空に投げ上げられた。人々がかたづをのむうち、間髪を入れず朝日は弦をはなすと、中空の餅はパット割れ、瞬間、九重の頂きに火柱が上ったかと思うと凄い爆発音が起り、館は暗闇になる。



終幕

白鳥に化身した、くす姫の端麗な姿がそこにあった。よく見ると腕に、あの時の腕輪が日光に光っている。四周から、心が洗われるような旋律が流れてくる。

(第4幕) 餅の的

かなわぬことのない欲望に増長して朝日長者は、行く所神の畏れを知らなかった。

ある年のお正月、館の中は、豊年を祝う餅つきで賑わっていた。次から次と踊られる、だんご踊りや、福餅引きの競技は、村人たちも含めての心のやすらぎの時である。弓の競技に遊びあきたのか、今度は、今ついたばかりの鏡餅を的にして射るのだという。

鏡餅を神聖視する人びとは、流石に驚き又畏れる。

ことにくす姫は米の精だ。動揺して、中止するように哀願するのだが、奢りに狂った朝日長者は、容赦なく鏡餅にさせる。そして、皆の注視の中で、弓をひきしぼり、矢をつがえてはっしと放つ瞬間、轟音が起り、火柱を立てて九重の山々は怒りたけるのである。さしもの贅をつくしていた朝日長者の館は、あとかたもなく無残にくずれてしまう。

そして、廃墟と化した焼跡の中から、一羽の白鳥が静かに羽搏く。それは、米の精だったくす姫が、朝日の驕慢さに愛想をつかし、憐む姿でもあった。